



重修真書太閤記
十編
九

~13
459
99



〜18 種
門 5
459
巻 99

神飛

吳書太閤記十編卷之廿五

後藤又兵衛陣氣と見る事

并五十路井一宮へ行谷忠兵衛と説江村と降
を車

内府秀吉公御渡海の注進擲の齒と引う如くいり
しうの長曾我部元親秋元九兵衛と書翰と持し
一宮と遣てけるよ一宮の城と居らるける長曾
我部彌三郎信親父と書翰と見終り九兵衛と向ひ
其方へ我と伐うて當城と守るへ秀吉上方とあ
は是と討んと容易うと思ひつるよ當國へ

同政
會印

本門二編卷廿五

渡り来る由はり是天秀吉と以て當家と與ふるの
のあり不知案内の切込へおひさ寄是と討棄んと
心易とへしとて秋田將監野中四郎兵衛吉田五左
衛門中野内久助以下一万五千余騎と本國へ引
返り爰は後藤又兵衛へ信親の居たる一宮の城と
望見てあは不思議や昨日よてハ城中の氣と信親
の加勢の陣氣と一様なりけり今日ハ各別に見
ゆるとや是ハ元親本國と氣遣ひ信親と呼とりて
海岸と固めさると覺えゆつとや此信親の陣と
打て見申へし實は信親此処に居とんハ此城十日
とハ保申よりと申げは黒田孝高尤いりとして真

先は切りけりを見て蜂須賀藤堂堀仙石一柳
續けくと競ひけり後藤の見積り如く
信親の陣忽ち攻破らる秋元九兵衛さふくは手と
碎つて防ごしとも終りかへ引退さたり斯
有のちハ總軍直よ一宮に押寄せりとも要害よ
けは急よ攻上りけり防禦力とつくりけるよ
しより寄手よとよ攻わくも此上ハ攻具と支度しと
總攻よ攻へしと評定とる処へ五十路井内匠罷出
しりハ秀長卿よ時來りしゆのりか其方一宮城
中よ入谷忠兵衛と説て降参さとへしと仰らしけ
るよより内匠畏り一宮よ趣さけるよ一宮よとへ

五十路井う来りしを見て其方へ加藤清正は降参
をしと聞し何の為と爰来りしをゆこのひけと
へ内匠答ふる様ゆりよも清正陣中ふあると相
違ふしとれは就先達ても交通を以て申上り如く
長曾我部家の大事の時節に至りし故ひそり申
上りすと存し是追参りては忠兵衛故に御申通し
給りゆへと申より早速忠兵衛に申入りし忠
兵衛聞て何といふと五十路井う来りしとゆ早々
呼入ゆへと申より城門を開て忠兵衛に役所へ
入ゆとへ忠兵衛のうに内匠其方へ加藤は降参し
今も何と説んとて肝太く當城へ入来りしと

如速に首を刎つては奴なれとも一通りの事と聞
て其後と時刻を延しとゆ長曾我部家の御大事と
云し何事ゆゆといふ内匠うしとまり其事ゆゆ
長曾我部の御家の面々も御存知の如く忠臣秦の
川勝の御孫よりしり然るに只今の体ゆゆは房
一不忠第二不孝第三不義に陥りあふとと我等も
今追心付申さば各も更し知あふとと覺えゆとい
ひも果ぬは忠兵衛大に怒り何に内匠其方重代の
主君に背き不忠の身と以て御敵の使とゆり當城
に來り却て累代の主君と不忠不孝と申条全以て
人間の所業にあはれ誰りある此奴引出しあはる

殺しよ殺しよと云うの若殿原承らうのい
ひつら立ちくの時内匠の申様いりよも主君よ
背さ内匠の躬と御誅の心と今少御思慮ある
御住あされいぞ土佐國の長曾我部の御家の何より
座いよあり勲功の賞として御拜領の國よいよ
伊豫國の河野の國よいよと切取あひよ
無道と申へくは讚岐阿波の細川守護の國ていよ
のと御打取はと私の御所行と申へくは
細川系圖よ細川頼之の弟讚岐守詮春阿州勝瑞
み居て阿波讚岐の守護たりその子讚岐守義之

四國の管領となり讚岐よ満久持常成之義春之
持持隆と相傳をよ天文廿一年八月十九日三
好義矢主の持隆と弒しけい細川滅ひ三好權
と昇ひなり天正十年九月廿一日元親兵と起
し勝瑞と圍こりるとよ三好存保城とて讚
州へ落行しあり讚岐阿波ともよ元親の進退と
なりよたり
主君の無道よ従ふ臣たるの道なるの主君の
無道と諫めて主君の家と繁昌をよむる道めく
ひり能々御分別あるへいと申げると聞て谷忠
兵衛惡いめくいひ様ぬ其義なるの思ひ知をく

呉んぞとて人質曲輪へおし入らひし番と付さ
其後忠兵衛申けるの秀長五十路井と使と辨
舌と以て我等と説ふせんため入城させし是と
人質曲輪に入たりとの知り定めて五十路井り
説ふをて帰るなりんと今宵の油断しとあり
其処へ一夜討しと此の鬱氣を散せしと思
ふに如何とありけし若侍たち一議も及ば
同心を然に其用意をゆとのふふとあそわ
兵とくつて五百余騎今夜子丑の刻に打て出
と兵糧つらひ馬と草飼なりを静めて待たりけり
寄手の方より黒田孝高秀長卿へ申上ける様谷忠

兵衛今夜必定討て出へく其時味方何れも油断
の休不見せ夜討の勢深々と引入さて四方より
切掛り只一時に攻詰むと此城を乗取んと一瞬
間も有つと謀りける諸將のとも尤も同
意して篝もたうげ折子木をも打をびりりも打
緩つて休息の休と見をけし案違ふに谷忠兵
衛槽より是と見せし城中のめのみ向ひ申ける
何れもあしと見せし寄手今夜の篝と焚は夜廻
るもをば馬の鞍とたらしめて休息せし体はくさ
實に某う考へて少も違ふに彌天道の恵と覺え
たりとて小躍してこれを歡ひ既し其夜も亥刻過

子の刻のろめとなりけし谷忠兵衛真先も進
 静の城門を開きと揚げし小六の陣へ切て
 うら散亂したる忠兵衛得たりと機に乗藤堂の陣
 へ駈入の藤堂も肝をつめ夜打の入たる各用
 意わしと呼らり是も四方へ引退く忠兵衛の
 つし勢猛く尤も有りと駈さて切て廻し黒
 田孝高寄手の小勢を引包んで打取と擬勢を
 のりの猛げしと黒田の勢も散々打破られ散
 亂と忠兵衛も駈廻りて下知なり秀長の本
 陣へ切入て勝負を自餘の業武者も目ふりけど

と揉よのんで攻立し堀一柙り勢立あもよく
 打負たり今いもや總大将の本陣なりと谷忠兵衛
 のさ進んで真先と鎗と取て走入しあいの
 帷幕のこの嚴重しと人の忠兵衛大も不審
 何のちと逃たりけん儲も逃足の早と大將軍
 おけもの理なり尾張の國の土民の子と聞ゆのど
 それ我等を討んと寄來るとあを奇怪なり然と
 へ残念かと牙と咬て立たる処へ何処も打たり
 けん鉄炮一發ひく否仙石權兵衛田中久兵衛
 小西彌九郎前後左右より潮の涌如く追取まて
 攻りしと谷忠兵衛大もあされあも口惜の敵の

謀^{こころこ}に落^{おち}入^いたり然^{さう}よても何^{なに}もとのとわあるいさ切^{きり}
 拂^{はら}ひ突^つ拂^{はら}ひ此^{この}陣^{ちん}中^{ちゆう}と馳^はりてふと下^{した}知^しははしともの
 藤^{とう}堂^{どう}蜂^{はち}須^す賀^が堀^{ほり}一^{いつ}柵^{さく}り勢^{せい}稻^い麻^ま竹^{ちく}葦^{あし}の如^{ごと}く寄^よ来^きり漏^{ろう}
 さしと取^と圍^ゐる聲^{こゑ}々々谷^や忠^{ちゆう}兵^{へい}衛^ゑ降^か參^{さん}をよめと呼^よを
 り呼^よをり切^きりて忠^{ちゆう}兵^{へい}衛^ゑ取^とりよめけを獅子^{しし}の
 子^この荒^あれし如^{ごと}く狂^{くる}ひまをれい上方^{じやうほう}勢^{せい}をさ間^まあ
 をび攻^あま立^たて切^きり突^つつ切^きりけるり谷^や忠^{ちゆう}兵^{へい}衛^ゑをさ間^まあ
 騎^き三^{さん}百^{ひやく}よりり打^うたされ山^{やま}の手^てに馳^は向^{むか}ひ一^{いつ}息^{いき}の
 く堀^{ほり}久^{ひさ}太^{たい}郎^{らう}のうさしと切^きりてうり是非^{ぜいはい}ふ打^う取^と
 んとひしめさける処^{ところ}へ黒^{くろ}田^{でん}の勢^{せい}を來^きりけるり
 後^{のち}藤^{とう}又^{また}兵^{へい}衛^ゑ母^ぼ里^り太^{たい}兵^{へい}衛^ゑ管^{くわん}六^{ろく}之^の助^{すけ}真^ま先^{せん}に切^きりり

う谷^や三^{さん}百^{ひやく}騎^き多^たく討^{うち}死^しし百^{ひやく}騎^きよりりなるり
 けり忠^{ちゆう}兵^{へい}衛^ゑ馬^ばを切^きりてけるり黒^{くろ}田^{でん}の手^ての馬^ば武^ぶ
 者^{もの}一^{いつ}人^{にん}切^きり落^おち其^{その}馬^ばに打^うのり堀^{ほり}の勢^{せい}を切^きぬけ
 見^みるはるり廿^{にじゅう}余^よ騎^きに打^うたされ夜^よの初^{はつ}めくと明^あ
 りる忠^{ちゆう}兵^{へい}衛^ゑ此^{この}勢^{せい}と前^{まへ}後^ごに立^たて蜂^{はち}須^す賀^が陣^{ちん}へ切^き
 めくる小^{せう}六^{りく}よりり死^し武^ぶ者^{もの}の如^{ごと}く様^{よう}をよめとて中^{ちゆう}
 と開^{ひら}き通^{とほ}りけるり忠^{ちゆう}兵^{へい}衛^ゑ此^{この}陣^{ちん}を馳^は破^{やぶ}り味^{あじ}方^{はた}
 を見^みると只^{ただ}三^{さん}騎^きにどなりり然^{さう}とも城^{しろ}に入^いん
 と諸^{もろ}燈^{とう}を合^あはせて馳^はけるり蜂^{はち}須^す賀^が勢^{せい}是^{こゝ}を追^お急^{せう}
 りて付^つ入^いりぬさるりんとおのふ処^{ところ}に城^{しろ}中^{ちゆう}
 り鉄^{てつ}炮^{ぱう}を打^うけ江^え村^{むら}孫^{そん}左^さ衛^ゑ門^{もん}立^た顯^{けん}るれ主^{しゅ}人^{にん}の

安危と心とをば一己の勇と振ると味方若干討
せし不忠ののそれ打取と下知しけるより忠兵
衛をん方なく白地とさして引退く白地とて江
村の變心と聞元親つくりおの様うのり諸方皆
上方勢と打破らんと朝廷と茂如し宣旨と忽緒
をいよりの人望と背き天道の悪と受し故と知
る然ハ早く土州へ引返し先非と後悔しつる由と
執奏し御許の其時本城と共土州の味方と悉く
ふはる共とへさなりとて讚州豫州の味方と悉く
土州へ呼とり大黒主計頭大高坂權頭姫倉治兵衛
三人と白地と残りあつて成らんとしなり

長曾我部元親本國へ引返を事

并福嶋正則勇戦の事

江村孫左衛門へ谷忠兵衛う出跡とて熟と思案
をよ四國とて大方敵となりたりくして如
何なる猛将勇士たりとも是と盛くへをよ難
あつて其故のうよのふ四國勢一人討てて
一人減し二人手負へ二人と損を終るに残りなく
あつて打あさるへ寄手の日々勢加るに数添ぬ
頃て十万といひしも十五万廿万よも及ひはん是
天子と重んじ宣旨と尊ふ故なり然ハ早く秀長
卿の御陣へ参上し主家の本領たる土州と安堵を

へき様頼と奉らるゝと思ひ定め五十路井内匠
と打連出城しそあらち大和納言殿の御陣へ伺
候しげと秀長卿一宮城と請取らひ孫左衛門と
召出され神妙なりとて和毛の馬一疋引出し貝鞍
置吉光の刀は黄金百枚と賜りぬ江村實は畏ま
るりける寛仁大度の大將まゝ有へとも覺えび
と感歎する事限りなく次は五十路井内匠と召出
され月毛の馬は長光の太刀黄金百両賜りて其
方今度の働拔羣なりとあれと賞しあふ内匠涙と
流し某何の功もなきいと如是恩賞は預りいと勿
休なくいと申けるを秀長卿のいと其方のいと

らきよらうて一宮の城と取得しはは功なりと
いふへうらび切ありて賞を受勿体なりとつとへ
うらび然其方急き豫州へ立帰り此書翰と清正へ
渡すへとて渡さしげれは五十路井内匠は豫州
へを帰る其後大和近江の両卿は一宮と打立白
地の城へ進發あり抑この白地とつと処は山峩々
こゝに聳え大木麓は茂りて何処ありも城中と見
ると難く山川帯の如く廻りて自然と堀の要害を
なると然も岸高くして浪をゆり路は追手搦手との
うら二筋ありとも坂道峻しく九折と疊たを二
人並ひて押ここと得ど山上より峯傳へよ土州へ

通路ありとも外人たゆまず是と知を兵糧ハ日々
 本國より運ひ入玉薬より澤山あるうへ守る処
 の侍せよゆるされ一各譽ののめりこれあり二
 里と隔て池田の出丸を構へたり上方勢押寄お
 ごと攻るといつへとも寄手損亡多くて城さうな
 弱と見えび黒田孝高さよくと工夫それとも嶮
 岨の平く法もす一流石の後藤もあされと攻め
 してを居さうける讃州と向ひ一浮田七郎兵衛
 の細川源九衛門と打破り讃岐と平均とそれあり
 白地へ押寄げらう白地より二里こほさる瀬原
 とつふ切処と砦とさうまへて敵大勢支えられハ進

むとあさくは然とも四國のうち三國をちや打破
 らせりよハ元親土列一國ハ引入嶮岨をたのめて
 敵を防らんとも由を聞加藤小早川評定一豫列
 入ハ小早川の福守孫六兵衛をのち一置清正隆景
 二万三十余騎を率ひ土列新瀆口へ發向ひあくと
 長曾我部掃部頭ハ阿列の軍と打負本國へ引返す
 山内の城より手疵を養生せしうち追々快方
 ありハ一宮の後誥して先度の恥辱を雪めちやと
 ありハ処子秀吉南海より土列へ直と打入たまふ
 由諸方の注進櫛の齒をひくら如くありけしハ掃
 部頭大とをどろを山内の城を出て大瀆の本城は

入依岡刑部石谷帶刀かゝり評定し鶴丸君を山内
へうめし我身ハ三宮治部左衛門尉野中喜平次以
下一万余騎をまゝかへり南濱より出寄手を待
かけりける所と内大臣秀吉公の御船ハ土列
の西南幡多郡の大嶋に着玉ひける所此ところを
敵備かくまゝ軍兵も居合さけりけり大軍のこり
かく上陸しあゝる兵糧抹の手當をとくのへら
せ我れより大濱へむけり寄玉へ先陣福嶋市松
正則真先よとて押行は掃部頭入從人処の
土佐勢多少の志らひ馬畑たてり押さへは正則
大よよろこひ上列は入て一番乗ハ地並はり

と同く馬をせけり桂市郎兵衛吉村又右衛
大橋茂十郎大崎對馬守可兒才藏吉田彦九郎佐川
九藏かと我ちとらりと續きたり掃部頭との間矢
頃ふあはれ矢合の鎗矢一の射ちあはるやいふ抜
ゆきて切やけ掃部頭ハ四國に聞えり勇士なり
正則ハ上方は名譽の剛のめりたるひよ能てきそ
一足もひくお引くと揉合たり兩陣の軍雄雄のま
た見えりからさはれ加藤孫六嘉明荒馬のりの
達人上方第一の悪馬をちらせ横合より攻付れ
ハ伴團右衛門藪與三左衛門尉川村權太左衛門我
先ふこはくきたり其跡より片桐助作脇坂甚内後

走りと馳け逃はさしもみ猛き掃部頭ハ一万余騎
 散々打あやみされ既又敗走せんとあしける哉
 見て掃部頭真先よとく之四尺五寸の太刀を以て
 切廻逃ハ上方勢よと引色ありみけるみより
 福嶋市松十文字の鎗を以て立向ひ追めかへし
 戦ふ処へ三の宮治部左衛門野中喜平次掃部頭を
 たまけそ切や短兵急攻付たり福嶋敵を兩
 方よりけ散々切合処へ桂吉村援さ入り入亂れ
 て戦ふうち掃部頭と市松と無下みあか寄合た
 り掃部頭莞爾と口らひ寄合て無手と組や馬
 より下立志を捻合たりけるかいろより仕たり

けん掃部頭はまゆい倒るゝ処を市松よりさし
 押倒し組伏遂は繩をかけたるける茂大勢出り合
 内大臣殿の本陣へ引めて送りそのうち大音聲よ
 長曾我部掃部頭を福嶋市松生捕みたりのある
 人々早々降参せいのちを助くへと呼たり呼
 たり攻たりかは何ともし氣をくまして進
 得以三の宮治部左衛門ハ桂市郎兵衛と戦ひける
 や終は打落され四國方總敗軍とありなり

重修真書太閤記十編卷之廿五終

大陽記十編卷之廿五

三

[Faint, mostly illegible handwritten text in a large rectangular frame]

重修真書太閤記十編卷之廿六

長曾我部信親大濱籠城の事

并秀吉公陣取手配りの事

福島市松正則長曾我部掃部頭と生捕三の宮治部
左衛門と討取て進み戦ふると味方の猛威日頃
一倍し四國方野中喜平次心なればも敗軍の勢は
引立ち散々なりて逃るるを吉村又右
衛門道さしと跡と慕ひける喜平次も引返し又
右衛門と戦ひける吉村は世に聞えたる勇士な
り踏込切りし野中終に打負又右衛門

大隅記十編卷之廿六

のため首と取とる是より後ハ四國勢足と止
こののちく總萌とこと成みけり

貝塚天満移住記と天正十二年三月廿七日土佐

國長曾我部宮内少輔より年頭之使者許顯如上人の

參着御對面太刀馬代三百疋御返禮太刀馬代五

百疋 十三年七月三日土州之長曾我部御成敗

ふはさ今日秀吉御自身淡州本表迄御進發云

云先勢ハ六月十六日美濃守殿大将とて御出

陣阿州讚州兩國敵退散云々但阿州木津城へ取

詰らとて干今不落去寺田又左衛門彼城下りて

鉄炮に當りて死 今度新門様教如上人御上落

御見物云々其次廿七日於大坂秀吉へ御禮と御

出御茶之湯あり但座敷へ秀吉ハ御出なく宗易

一人斗なり玉間の山市繪と見をらる七月七

日の為祝義秀吉へ御帷子五樽二荷 阿州一秀

吉御舎弟美濃守殿六月十六日木津城七月五日

落去讚州阿州兩國手またある敵なりと云々長

曾我部自身阿州一の宮迄木津の城押之の為と

出らるるとも何の行に及る土州へ打歸由か

り長曾我部懇望大畧入眼ありとて此處小藝州毛

利家より存分ありとて彼懇望相破云々此趣

伊豫國と秀吉より最前毛利家へ被遣之處伊豫

と藝州へ可給遣との存分と云々七月六日秀吉
御上洛洛中衆の風流さそらるへと由なり云々
京都の玄以宿所号氏部卿法印元妙顯寺と云
寺なり夫々要害と構へ堀とあり天主と上てあ
る秀吉御在京の時へとと御座ひなり常の玄
以宿所なり今度秀吉御上洛關白よりなりあふ
近衛殿前入道殿下前久公之御猶子と云々七月
前日關白時藤原朝臣と云七月一日十一日參内
あり禁中御能あり上下京の手能秀吉より被
仰付と云々關白より成給より殿上人諸大夫
なりたる人十人もあり御能五番弓八幡田村三

輪紅葉狩呉服の切今度御能關白殿へ所々
進上上下京衆より盃臺六七百計折五百合計
庭上夜中分並へたて番衆あり當日の清
涼殿の御馬道の少下へ引下てりなる御縁
と出されて其上盃臺折以下と置とてり又
云右之折盃臺以下上下京之町人の進上申今度
盃のとりと御覽よほさて此度の折盃臺以下
馳走仕仕へと秀吉公より被仰出ひなり能の大
夫へ上京よてのゆりけり伯父リ
ウへと云入道前虎屋と云たるのなり下京の
大夫へ禁裏御能何よても被下し事無之大夫

若衆なるとふれハ御扇被下ハ事なとあり今度ハ
秀吉公より越後の帷二百進上りてそれを則悉
被下説ね加様ののの極臈六位りちて出て遣之
舞臺へ出し遣ハ事無之なり十八日秀吉公へ
為御使御顯如上人の刑部卿下間貝塚より今日發
足其日大坂逗留十九日川船より京都へ罷登
りハ処ハ關白殿御船より京都より御下向淀
て參り逢て御案内申されたどハ御座船へ被召
て只兩三人より終日御雜談あり徳雲ハ跡より
まのゝと畢其日淀の城より御逗留翌廿日とよと
と云ととあされて御川狩あり刑部卿とも召と

て色々御雜談より見物申施面目ハ門跡より今
度關白より給御説義とと一腰鳥目三千足
御進上廿一日大坂へ御帰城より將より被申
入子細ありて刑部卿豊前川野右三人ハ大坂
逗留申ハ其内ハ土洲の長曾我部進退之義佗言
相濟土佐一國より伊豫讃岐阿波とハ秀吉公へ
渡り申人質以下出可申より相定四國へ御勢之衆
過半引退云々
土洲大濱の城といふハ九郭より堀深く堀高
元親よりと以て根本の城となすたどハ要害とい
ハ兵糧玉藥とて分國中ハ並ひなく其上ハ籠城

の兵士まゝ五六万よ及ふ縦は日本國よ三韓大明
子そ一味同心し寄來とも何るところあわ
んと日頃いつも居るあの居るところの名城
と勇ま進ま居るたりける處へ長曾我部彌三郎信
親馳來り入城し容子と聞ひ秀吉を上陸し
長曾我部掃部頭の生捕ら三の宮野中以下の戰
死し打漏され兵士ハ爰ニ馳集り如何をんと評
定の処なり大ニ氣力と増信親の
馬の前と互ニ先陣と望みけり擬勢をりハ荒涼
なり大濱の城代依岡刑部左衛門石谷帶刀の外

の諸將打寄信親の伊豫讃岐阿波三國より上方と
合戦を始末と聞き天然自然の名大将也遠き往昔
と尋ねても多く得難き御器量なりと何れも感
しつつ只今當城ニ御入あは是も御開運の
瑞なると式代しけると聞き信親大ニ喜ひ面
面の賞歎ハ身ニ不相應のとあり當家運くむ
滅亡をとて遠きと誰々も二の足と踏み處ニ
某と大将と必死の軍をんと勇ま志の不
と悦らしも喜しもものめと詞と知れ但秀吉
ハ大軍なり老練の名將なり我等と對揚の敵ニあ
らバ掃部頭をとめ何れも武勇ニ於てハ天下ハ

其類ありまゝ侍はれとも只人と知の目鏡闇く
 しく生捕となりあへり然らう福島あれと生捕
 りとあはし首と取むとの暇なるといふもあはし
 それを熊と生捕して秀吉の心も大形ハおのひ
 知てさう次は本陣ふ引めて行く時秀吉あれと殺
 しむるは是まゝ秀吉の心と知は足り面々何と
 おのひあふそやといふれげは依岡以下何とも
 面とたは我々うおのひも寄ぬ処へ御心の付あふ
 と實は尋常の大將あはしと何とも詞と等しく驚
 歎し扱のち若殿の秀吉の心中で何と思召ひや
 と問ひては信親崇爾と打笑ひ秀吉四國をうりて

平治をんとおのひ掃部頭とも熊谷とあはし殺
 したへ然るは彼等と殺さば是は終は彼等と用
 ゆる処ありと思ふ故あり何さ九州あり關東
 あり壯士一人の國も郡も代てりあはし
 あはし去は當家と責むも阿波讃岐伊豫三國と削
 り過しとおのひ知たり土州の大事あるやと
 あはしあはし如何あれは土州と責む我等一跡
 と亡あはしと思はる今年あはし過つては秀吉
 今年五十と聞ての上越中の佐々内藏助謀叛と起
 をしと云説もあり四國の海と隔てたとも越中
 の國續なり秀吉あれをの容易にあはし且秀

大問已下編卷七六

六

吉實は渡海を以て信親の心を真しく思はれ
を依て信親の上方勢と必死の軍と先づ累代相
傳せし土州の民と殺さんといふのひも寄る城と
堅固に守ると以て第一の功となす上方勢は退屈
さすべくあつたに面々と共に出陣し必死の
軍のまゝ早く能く敵陣の虚實を計り然してのち
籠城の道ありて籠城の術あり山よりの
て人数をうくし山に就て人数を開き村里に添て
陣の取様嶮岨より守る様切岸出口の備柵逆
茂木針貫戸張の構様とて上方の作法を能く子
細に見たりし我等が家へ傳へし処といふ大い異

なる処あり然にあつて某弱冠ありて戦ふこと上方
勢と破りしなりと面々も此心とて敵に向へしや
といふれけし依岡石谷とて依岡左京本山
将監大谷兵部丞本井彈正池左近右衛門片岡民部
丞森式部丞吉村左近大夫難冠木次郎兵衛受領上
野左佐田勘解由以下六万余騎勢は不足も見えさ
すげり又秀吉の本陣にては長曾我部掃部頭と九
鬼は預けて船底に居し福島への朝嵐といふ名
馬は黄金百両國光の太刀感状を以て賜るりゆり
て井樓と揚大濱の城中と能く見分させられその
後々の如き城中堅固にして急攻ぬさるる

是と是非との味方若干討死の兵糧玉
薬以下その費もまゝ容易あり依て此城とハ此
のうち東南より上方勢打入たり元親のうら
めふともはのふハ降参をへ我元より長曾我部
り先祖より領を地と奪らんと心の心よあつと只
元親り私に切取地と取返をを以て本意と比と
仰らんとしはより生駒甚右衛門細川山内赤松大谷
以下三万余騎ハ甲の浦平野權平糟谷助右衛門以
下一万余騎ハ阿州通路の本道へ向ふ福島脇坂加
藤孫六筒井神子田ハ大濱へ向ひ軍奉行より前田

玄以とり

前田玄以法印ハ所司代より出陣をことあり
流布本いづれも如此誤とのふへて四國
合戦の事實本書誤多し然れども校正する時ハ
全く改撰ありされハ盡さばりて大依と記

三ヶ國出張の勢土州へ引帰る事

并上方勢八方より土州へ亂入の事

元親義榮將軍の公達左衛門佐義國の長子鶴丸君
とのり立てて天下の武將とあはせへくおのひ立ちと
ハ殊勝ふとも秀吉公の王室と尊崇し民と安く

世と太平ふむさんと謀りあふに比て天地雲泥とのふへ

義榮將軍の御子の事ハ既ニ前々辨を義榮將軍の逝去永祿十一年二月九日なれば爰よりて僅ニ十八年なり義榮將軍逝去の後義昭君將軍に任しむひ義昭君信長と亡さんと企てあへとも事あはば却て京都を退去ありて藝州の毛利に寄食しあふ信長亡ひて今秀吉天下の權を握あへり元親の謀る処元より中國に向て非あり從四國切のこゝに見るべし秀吉公の軍勢をくま土州に打入しうの元親白地

の出張とて急ニ土州へ引歸せられ就て阿波讃岐伊豫三國へ出陣を諸大將のつとも人数を纏めく土州へ退たりけり元親高知に入て三宮平左衛門姫倉佐次兵衛野中三郎左衛門に對面しまつ三宮野中ら弟との戦死をこと痛くして是元親の心の足さる処より面々の子弟は骨を折を百年の身と傷をたり然れども其本意元親一人榮華を誇るべしとありもあはれ四國を平均して各郡村多く取を共ニ安樂と窮めしゆとおのひ一処よりをいとなれとも今秀吉が為に破られく多年の勲功いとなれともいなるぬ如何ぞの秀吉土

民より起り官へ内府人臣の極よのぼり位に従二
位より朝家の榮爵よ昇る加之國あまき知行し
勢海内よ掩ひ氣まき八荒よあまき天あまき地許
一人よひく是たごこと非と元親の數代弓箭の家
小生と纏綿のうちとう土州の大將なり生とたら
の果報の秀吉よ百倍まきたごとも今弓箭と取
敗軍よ及ふと抑たごり過る勇士とついで面々
ありついで秀吉り侍とも小誰りの劣らん城々
へ要害堅固よと兵糧乏しうと王薬よ倉よ
ちりたり籠る処の人数も少ふらば然るよ十
日廿日乃至ハ一月をうらよついで追落され

とおのついで天の心よりあまきと覺えり天の
心よりふらぬ地の利も人の和もたのめり
信親の大濱よ在とも謀りてこのののの容易
軍とあまき定めて元親とある心よ本領を全
きんと思ふあまき然ら此國の百姓を罪もあま
横死こそんころちも無念ひり柵とて逆茂
木引敵寄るともたぬと切て出ることひり敵夜討
朝けりあまき能々心を用ひ敵の謀りのり
一人も損したる末代まきの妄念ひりと細ゆうと
口説ける処へ斥候ののの共走帰り注進しける上方勢
甲浦よ押上隊伍とて寄來り其勢三万余とも又ハ五

大岡巴十編卷廿六

十

六万とも申ゆつゝも雲霞の如く旗さうのものと見ゆへ
ハ生駒細川の勢うと覺え御用心いへ」と申も果ぬ処
へ三鱗の旗おしたてて其勢二万あり阿州通路の本道
より押来いと注進以又一方より豫州へ亂入てゆひ
加藤とわらん申侍ハ山越よ越来り新濱口より攻
入此口より二無勢して防禦手當心のとなくいと
申來る

加藤清正豫州へ打入て軍功と辛と前より如く
と云とも清正の傳記と考ふれば此年の江州坂本
在て北國と押えり更四國は向ひと成り又
後藤又兵衛事も又兵衛軍功録に載り且今年十

九歳弱冠なり多し信

阿波讃岐伊豫國は向ひ諸將の事も土州へ引返け
る中も細川源光衛門久保駿河守秋森九兵衛谷忠兵衛か
と山の内の城と志して落来り見と上方勢城と取
圍攻て入つて様もなるとけるを城中より是と見付城門
と開きけし各入城してけるよつとて紛れ入けん
上方勢紛れして城中に入爰て火とけり久保駿河
城中混亂しけるを見て寄手無二無三は込入終久保駿河
守より長岡與一郎忠興の郎等富澤作十郎とて生捕た
りめして山の内の城も落けし細川源光衛門秋森九兵
衛の事も必死なり高知さして落たりける上方勢を

と間ぢく追うけ押寄けるより高知よても用心細
川秋森谷と城より内へ引入のつか諸方と改め見けるよ
こころして上方勢十餘人のちよりの忍ひけん城中よ
入たると探し出し一々首と切城外へ投出しける寄手
も元親の手配り嚴重よと欺さるこころとおのひた仕
寄と付遠巻よしてを居たりける

重修真書太閤記十編卷之廿六

重修真書太閤記十編卷之廿七

長曾我部彌三郎信親武勇の事

并加藤清正高知責の事

長曾我部彌三郎信親の大濱の城よ在て上方勢と
望し見るよ實よ雲霞の如く野よ山あも満々て
風よ靡く旗の手よ游龍の雲よ従ふ如く火危ふ
よと戒る編木の響よの驚濤の渚と鼓よ似たり盛
なりふ内大臣秀吉公そのよめと云ハ尾州愛
智郡中村土民の家よ生ととりぬ織田信長公よ
仕て草履と取つるのちりり其身の才智より

次第より侍あり物頭ありやうて城
主となり國主とあり今ハ大臣の宦と拜はと不思
議といふもあまうあを但静よられとあのみふ其
人と用ゆると真よ手足と使ふら如し然ハ加藤虎
之助ら如らあり福島市松ら如らあり片桐助作ら
如らありその徳その材各別あると右と左の手の
如く又足と股との如く左ハ右よ及らるるとも右
手らうりよてハその右の徳と施とと難く足ハ手
より卑らるる劣ありといへとも筋ありと何事と
う成らへと此心と推て彼よ及らるるとも是と通らるると
天下何の難ととあらん中國よ向て毛利と下

北國よ趣て柴田と滅し伊勢尾張よ進發し北畠
殿と威し今や四國よ渡り長曾我部と征しその
侵を処の阿讃豫三國と討平け本領たる土州よ臨
大濱高知の両城と圍むその勢震雷の如くよて猛
虎よ似たりとめハ六七万と聞えし勢も次第よ
増加るるとよ廿餘万よ及ふ兩城の通路と取切
て日夜鉄炮と放ち関の聲とあく其響山谷よ應え
てあひたつとあとい愚らるると然とも信親ハ萬夫
不當の勇將と胸襟の廣とと滄溟とと狭とと
疑ハ心膽の大きとと須彌ととて小ありと笑
ふ器量ととハ識鑒ととハ古今無雙の弱冠あるハ

是と見ると塵放り猶輕く兵糧玉藥多しといは三年四年籠城とるとも飢饉よのそむつことなしく山高く谷深いといへ涌泉とのつと滴りて水の手自由と得たり信親日々櫓のあり寄手の陣と望に見諸物頭と集め評定しける寄手所々の軍は打勝大に驕氣と生し役所く油断の体に見受たり各々へ何とおのふふといへ馬場五郎次郎國祐大高坂團右衛門福藤隼人等立ち入り入り寄手の陣と望し詞ひとし信親は申しのりり御諚の如く寄手の陣中勝軍は心緩く敵とあるとすい様子よとい就中福島市松の備尤四國勢とた

やとくおのり氣に見受ひあれ彼處へ一當あて此のとの眠氣さす可申哉と勇立びると信親は嬉しひは是と見廻し面々のつとて某り心も能うあつ然へ支度をへとて八月三日暮とくる頃大手の門とと開き一番は馬場五郎次郎五百余騎とて打て出二番は高坂團右衛門五百余騎三番は福藤隼人五百餘騎四番は大将信親千五百余騎鎮守の森の片うけよめとて時と待居たり

浦菴本は三月上旬出勢ありて七月中旬は四國平均は治めると事只秀吉公の才智有余より

遙々の行事流水の如く有る依てなり秀長秀次
 の思慮のこぼるる中々うへあつと云々是
 よもれ八月三日の合戦誤るる一又陰徳太
 平記は五月四國渡海と命と傳つらる其人々美
 濃守秀長秀次宇喜田八郎蜂須賀彦右衛門吉川
 元長小早川隆景檢使の黒田官兵衛仙石權兵衛
 前野庄右衛門中川藤兵衛高山右近伊藤掃部助
 中村孫平次一柳希助赤松次郎明石某筒井四郎
 尾藤甚右衛門戸田三郎四郎藤堂與右衛門あ
 たりそのころ四國退治心元なりとて秀吉渡海
 あるとて沙汰と聞て七月三日秀長よりあれと

留めし書あり是よりして四國渡海と止めら
 と北國進發は觸らしてとてなり其後元親降と乞
 けとて土州一國安堵して三男津野孫次郎と人
 質と出と秀長秀次津野と同道有て七月下旬阿
 州と立て歸陣ありけると云は八月三日合戦あ
 りるなり然れども今暫く流布本とて從て此
 と記す
 其日も暮て陣々焚く火も影くらくと絶く
 肘と張腕たてたる備あり馬場五郎次郎五百
 余騎鉄炮百余挺は多く放しと放しと煙ののま

た絶つるその間より徳先と揃つて突りつり面も
 振を攻立といへさしも猛ら福島陣四度路はな
 りて崩れ立正則大に驚げとも總軍正体なく取亂
 したる処なり太刀は刀は鎗長刀とひしめきこりて
 るその中へ案内知たる馬場勢右左より切て廻
 るこそがの正則めとあまし今いはずと必死に
 せりて防ぎ戦へとも馬場鎗先強くして福島を
 て追立ちらどつて見えし処へ大高坂團右衛門
 五百余騎とあめりて馳けし福島たよりりの
 三四段より引退く脇坂甚内あしと見て二千余
 騎と真丸は備福島と援めて馳しをたり福藤隼人

脇坂陣の後より五百余騎面もあつて切てめ
 る脇坂敵と前後に受死の狂ひといふの切
 て廻り東西南北に馳破り鋒より火と出して戦ふ
 たり福島脇坂に助けし又盛うへて戦ふとあ
 ろく長曾我部彌三郎信親千五百余騎真黒となり
 て寄たりびる信親四尺三寸の太刀抜くといわ
 たる幸切て廻し手の下に十七八騎死生に知
 を倒しあをす信親馬廻り十八騎の衆とて
 同一の侍と一様赤具足着あし毛の馬
 に乗て召具たりけり突も強く切も深うけ
 是等切立られて上方勢散々打つてけり

見て馬場福藤もさう進て本陣へ切らんとな
 引へさ塩合大事あり爰へ引へさ処なりと自身撥
 と取て大鼓と打さうゆう城の中へ走入たり上方
 勢五百余人討てい手負へ六百余人と聞えけり福
 島もさう口惜と思ひけり此城是非に乘破らん
 と怒りけり本陣より嚴敷られと制しわさふよ
 福島もせんうさうさく持場の備とくくくく総
 攻のさう圖とあそ待居とれ高知に向ひし加藤
 清正の五十路井兄弟其外江村孫九衛門尉徳居刑
 部等も兼て申含め計畧あはとも一攻をめぐそ

の上とくと評定し飯田角兵衛森本儀大夫木村又
 藏井上大九郎鶴平次小代下總庄林隼人あると先
 とし金鼓と鳴し攻りうううの城中ありも釣
 木釣堀と以て防戦し鉄炮とさひく打出し志ら
 と加藤の勢をこもひるまび堀へ埋草と投入
 投入攻たりう口三四十間あまり深さ三四丈
 におも堀あはの埋とせんともおもそれど
 兎角をる不とよ日既又暮よ及へ明日あを攻め
 よとて引退す翌日未明おあ寄てあれを見れり
 昨日埋たり埋草とも少くも残らば流しうけく
 塵さうりも見へさうけるよらう清正大よ不審し

是へ如何なる事と堀口よ立て見居ると城中
 うう見澄久武内藏助五人たり十三束うう
 兵と放らけと誤と清正り着たる兜よりけり鳥
 帽子と射切たりこれとも清正少もさうど静
 兜の緒とめ直久武殿と見たり存の外は手荒
 二あうけり朝うて楯の蔭へ入けると敵も味
 方も感しけり然とも寄手の大勢なり終は堀と一
 重引破り込入んとすゆりうとも城中の防さう
 た能とい入りの堀の端は楯つとありへ扣えこ
 り城中より重名入道蓮心といふめの打て出今少
 一年ころうの鬚髭と染ても戦ふことよ入道ふれ

いそれもうかむび

打太刀のめも乃ひとも久りこの雲の上を聞えあひ
 と詠とて敵の中へ打て入手と碎て戦ひけり
 寄手多く討とけりされとも木村又藏とてさう合
 追つりアツつ戦ひつるら老武者いれ終よりか
 ら討とけり

片桐助作大濱へ使節の事

并信親高知へ赴く事

大濱よてへ寄手信親のこめは打破らとて福島
 正則志さうり口惜りとも本陣よりゆきあけ
 けし心の儘は押寄て軍をとるともうかむび拳と

握り齒とりと城を睨とつめ居たりける處は本陣より片桐助作と召したる助作何事ゆゆと公の仰として片桐と申渡さしけるに四國征伐其方共の骨折まらうと思召しけるに阿波讃岐伊豫國とて御威勢よひに從ひ今も土佐一國とありぬたし土佐國へ元來長曾我部祖先より傳領をし居られ強し召放さるへさるあゝ元親先祖の國を大切守り朝廷の宣旨と重んじたるんよの誰ういふれと攻むへさるつハ堅固の田舎人なり朝廷の貴さとも宣旨の重さ

とも知さる上人の國とも切取つらん是ともめぬの身よのさも有ぬア何条深く咎むへらんや是等の心と得て大濱の城に入信親を説得とへとの御説なりとありげとの助作ここより何さや大事の御使よの御威光と上よ著て入城仕り信親と申て見ゆアと御請し我陣処へハ歸らび具足脱とて越後の縞の帷子と上下着て金作りの太刀刀尋常と出立馬よのろむ小童子四五人よ物のこを大濱の城の大手よ打よ是ハ内大臣家の御家人片桐助作よの城の御大将よ申へさるよて參向のこよ此旨と以て披露あるへ

くゆとのつめの静し申さるに城中までも是と聞
敵陣より使節を立ちしこと珍しくは然も武具
と著るべ弓矢と持て使者の作法故實よりあへり
失禮したらんよの流石南海邊鄙のみの知とと笑
らんと死しての後も恥りし早く城門を開き
使節を入ると評定一決し即門を開きて會釈し
けさの片桐もよの式代して入城し書院に昇りけ
れに信親出會りしとめなり内大臣殿の御使か
る信親と對座の憚ありとして上座に請を片桐も敬
屈し只今内大臣家と長曾我部殿と弓箭と取あふ
上へまの牛角の應對あり然らんよの助作の内大

臣家の家人なり長曾我部殿の上座に冥加の初と
おそろしく去なり内府の口状より對座
の御免と蒙るべしと申し長曾我部の家人歴々多
く並居たり片桐の詞よりば理あさるる然
も禮儀正しく然としてこそ臆を色も見をば
何れも打寄く何さよ勝とさる侍りか敵城へ入る
武具と帶を以郎等と具をばあはれ心の剛ある男
るかありもそのいふ処實は道理なり何事といふ
まやあらんとりとびとのとて扣えたり信親弓箭
と取て勝敗と争ひ對陣して死生と期を間し使者
を賜らるその始末何事りいと申しけし片桐袖り

合謹て申様内大臣家の仰よ五月このりて家
僕等とこ下して長曾我部家の往昔朝廷に忠功
と立むひ一勲勞と賞せりと土佐の地と賜らりて
數代在國のされ長く京都の大番と許されし事
朝廷の御恩莫大なりと申す然るに讃岐國と
切取阿波國と押て知行し伊豫國と亂妨し累代相
傳と河野と追出されし趣意何事よ明明白白と申
披すはへと申す其答を明あらしめ刺海岸に要
害と構へ軍兵と籠置と一向合戦の用意をあられ
ゆるり使者止と得と合戦のさしては由内大臣
家より使者下向のち數十日と經るといへともた

しりある消息あさうり既し御動座よ及ふ然り
といへとも往昔の忠義と温めし大功よとせ世
世不断といふ今の本文もあしこの重ねて某と差下
されし早々切取つる阿波讃岐伊豫の國と返上し
相傳の土佐と平均と治め先規と守りて南海の警
衛と急らびいこされ然るに然とて別し所存
のいし其由とも申されいへと有けるよあり信
親と始め家老の面々顔とたど鳴とつめあし
黙然りつて居らりけると見て片桐とて座と
進め是の内府の申さるるよいひら直盛り心よ
て申いなり御先祖川勝主朝廷へ莫大の勲功と立

ちよよらうて土佐の國の地を賜ふらう然
 とて土佐の守及以下國司も郡々の司もゆへ正
 税公麻の若干京へ運上ありし然らう然
 倉右大将頼朝卿征夷大將軍を補ふひ後長曾
 我部の家土佐の守護もなりしとて尤へみ
 く蓮池權守家綱を下風と立ちしそのちへ圓明
 寺攝政關白實經公一の御國よるをいひし
 彼家の令と膝と屈しあひしとも有つらん尊氏將
 軍の御味方と馳加しあひしとて武家の列し
 立ちしとも國人の並ふ負ふられし御供衆走衆
 了ても昇られし細川四國の管領たるその下み

付むひし非とや細川亡しそのち三好ら惡逆を
 見からしむる先々忠功の家を汚しむふといり
 ぬも口惜きとよむるや能々御思慮して累代の
 忠功失ひむるすき勘辨こそ願ふしけと申
 けるよより信親も家老の輩もたぐしうのむき
 兩眼みかきをらめ居たりけるか信親かこ
 まりて答へけるは御使者の口状はくして承を
 さい當家の先祖ふては川勝土佐の國の地を賜そ
 り在國いたしより代々その職を法とめて朝廷
 へ乃貢の運上年々をこそり形く輸しんと先々の
 記録ゆへハ正しき事ふ何さぬ弓箭をとて武

士の列子加とつしとハ尊氏將軍の御時よりみそ
それより世間と同じやうに乃貢を納め申さば又
三好等々思逆をこの頃の風俗とちりひ善惡の系
らびもねく他の國を切取ひ事今さらそづかしく
やけり朝廷の律令またるひひ罪まよひ恐れ入て
ひありその罪を正されんと御使とちりせんせ
偏は當家をそろほして當家の所領を奪ひ取へ
き御勢とちり得ひより終は合戦及びひ朝廷
の御使みそ漫は他の國を攻ひ事盜賊はひとて
れ誠めよと仰せられと何とて對捍仕るへさや
と申けしハ片桐扇と家み取かを信親よあとも

九様思しひと高知へ御越あつて元親よ由仰合
され早々朝廷へ急状を奉りるへ大功も賜をり
は領地の世々不絶とて子孫のゆぐたけを限り
ハ逆の罪を犯して由謀叛以上はあらさむハ叔め
らむぬ法令おろ元親の犯さし罪多けしとも謀叛
といふへき罪か何とて土佐の國を叔公せらば
へさやと申よより信親も心とけ直し高知へ馳行
けしハ片桐ハ本陣へ歸り参る

重修真書太閤記第十編卷之廿七終

